
川は天鷲絨、月は紫朧

伊達倭

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

川は天鷲絨、月は紫臙

【Nコード】

N0053C

【作者名】

伊達倭

【あらすじ】

川縁に寝転がる、一人の少年。彼はひどく堅い口調で、地味な高校生だった。ふとしたきっかけで、私と少年は、度々、会うことになる。それこそ、逢瀬のように。

0 ,

私が彼に出会ったのは、静かな春の夜のことだった。

1 ,

星の少ない夜だった。私は、近所の河原を散歩していた。後ろ手に組んで、ぶらりぶらりと。

明日提出のレポートは、まだ半分も書きあがっていない。気分転換なのか、現実逃避なのかわからないが、机に向かっていることが苦痛だったのは確かだ。

河原沿いの道には満開の桜が並んでいて、外灯に映し出されて随分と綺麗である。

ジーンズのポケットから煙草を取り出して、火を灯す。吸い込んだ紫煙を月に向かって吐き出すと、朧月おぼろつきが出来上がった。淡いそれは、夜桜の儚さに佳く似合った。

「中々に風流ですね」

その様子をぼんやり眺めていると、ふと足元から声が聞こえた。低いが良く通る男の声だった。

驚き飛び退ると、暗闇から学生服を来た少年がのそりと半身を起こした。近所の高校生だろうか。ひよろりと細長い体たいく躯と、整っているのどこか地味な顔立ち。銀縁眼鏡の奥に光る目は理知的だった。

「驚かせてしまいましたね。いやはや、申し訳ない」

少年　と形容していいのだろうか。学生服に身を包んではいるが、落ち着いた物腰は大人びている。だが、丁寧な言葉遣いの奥に、

どこか楽しさを噛み殺しているような幼さが見えた。

「夜桜見物、ですか？」

「あ、ああ。まあ、そんなところね」

「今夜は雲もなく、桜も映えるでしょう。やや月明かりの強さが気になっていたのですが、紫煙の朧月というのも、オツですね」

不思議な少年である。口調は古めかしく、取っ掛かりがないように感じるのだが、自然と会話に引き込んでくる。通常ならば関わり合いを避けようとするのだが、つい、今度はこちらから言葉をかけていた。

「少年も、夜桜見物？」

「ええ。尤も、本来は川を眺めにきたので、ついではありますが」

「ふうん。川、ねえ」

面白いというよりも、奇特である。目の前を流れる川は、眺めるに値するほどのものとは思えなかった。夜桜のついでに川を眺めていたならば、まだ話もわかるのだが。

「川をぼんやりと眺めながら、物思いに耽るのが趣味でして」

少年はそう言うのと、にやりと口元に笑みを浮かべた。余程、その行為が楽しいものであるかのように。

「古風……いや、変わった趣味ね」

「そうですね。まあ、馬鹿の考え休むに似たり。ぼうつと呆けているだけでも言えますが」

「ま、楽しければ、それでいいんじゃない？」

「ええ。そう思います」

屈託無く言うと、少年はふいと川のほうに身体を向けた。

なんとなくだが、もう少し彼と話がしたいと思った。

妙に細長い体躯。整っているのに地味な顔立ち。大人びた仕草の中に幼さ。律儀な敬語の割に、親しみを覚えてしまうこと。ひどくバランスが悪いようにも思えるのに、全体で捉えると違和感の無い存在となってしまう。何よりも、僅かな会話の中でそれに気付かせることに、興味を覚えた。

「隣、いい？」

「ええ、どうぞ」

少年は相変わらず落ち着いた声で答えた。

「じゃあ、遠慮なく」

彼の隣に座って、煙草を口につける。横目で様子を伺うと、少年も私を　いや、私の煙草を見ていた。

「ああ、煙草、駄目？」

「いえ、御心配なく。あまり見ない銘柄だったので、ついまじまじと眺めてしまいました」

「なるほど。確かにマイナーで、探すのに苦労するのよね」

ポケットから煙草を取り出して、少年に見せる。黒地に骸骨のマークが描かれているのが特徴の、デスというイギリス製の煙草である。

「ほう……初めて見ます。なかなか怖いデザインですね」

「ま、百害あって一利なしの毒だから、ある意味一番正しい表記ではあるわね。単純に味が好きなだけなんだけど」

胸一杯に煙を吸い込んで、やはり月にめがけて吐き出す。闇色のベルベツドのような川面に、朧月が映った。

「一利なし、とも限りませんよ。落ち着きますし、ストレスの解消などの精神的安定。単純に美味いと感じるなら、それを楽しむのも一種の利と言えるでしょう。最近では、ボケ防止効果があるという学説もあるそうです。勉強がはかどるとも聞きますが……これはやや嘘臭いですね」

へえ、と思わず声が出ていた。美味しいとは感じていたし、落ち着こうと思って煙草を吸うこともままあったが、ボケ防止というのは初めて知った。

「少年は煙草を吸うの？」

「いえ、僕は。吸いたいと思ったことがないので」

「その割に、良く知っているわね」

「物思い草にでも、と調べたことがあります」

大した理由である。いや、むしろそれだけの理由で調べてしまうのが、大したことだ。

「……そうね。じゃあ、思春期の欲求に対する適応の性格別パターンの類推、とか。どう?」

ふと思いついて、先刻まで詰まっていたレポートのタイトルを挙げてみる。少年は「へ?」と驚いたような声をあげたが、次の瞬間「そうですね」と川面に視線を戻しながら、しばらく眉間に皺を作っていた。

「……確か、同一視や昇華など、欲求を満たされず、その代替品として行う行動が適応でしたね。そして、どのような性格の人間ならば、どのような適応をするのか。それを自分なりに考察してみる、ということでしょうか?」

「ええ。少し考察してみてください」

「……そうですね、ではユングの性格類型から考えて」
少年の半時間ほどの考察は、一時間ほどでレポートに書き写され、翌日の発表で教授から大いにお褒めを受けた。

2、

桜が散った頃、再び私は河原を散歩していた。

煙草に火を点けて。後ろ手に組んで。

散歩の趣味など無い。レポートに詰まったわけでもなかった。

ただ、何となくだった。

ベルベットの川面や、月明かり。近くの道を走り抜けてゆく車のライト。どこか懐かしい、草や土の匂いに誘われたのかもしれない。

「奇遇ですね」

或いは、彼の話が聞きたかったのかもしれない。

「考え方によっては、桜が最も美しいのは、散ってしまったときで

はないでしょうか」

少年は相変わらず学生服を着ており、丁寧な言葉遣いで語りかけてきた。

「そのココロは？」

尋ねながら、深く考えず隣に座る。少年は、にやりと口元だけで笑った。

「散ってしまった桜を見て、咲き誇っていた頃を懐かしんでいるときに、脳裏に咲いた花が一番、淡く、儂く、故に美しく思えたからです」

闇の中で、幾筋もの滑らかな光の線を描く川。少年はじつとそれを見つめながら、詠^{うた}った。

彼は詠っていた。節も拍子も無く。ひどく堅い言葉で。

さして興味の無い内容でも、ちっとも面白くない口調でも、人を惹きつける理由は、彼が詠っているからかもしれない。

「成程、考え方によつては、か」

「ええ、考え方によつては、です」

ふう、と煙を吐いて空を見る。月は亡かった。

「春は勿論、夏も、秋も、冬でさえも。考え方ひとつで、桜はいくらでも美しくなります」

少年は、尚も詠う。

「力強く繁った葉が、きらきらとした木洩れ日を」

「燃えるような、それでいて儂い紅葉を」

「寒さに縮こまることもなく、胎動をうちに秘めて」

「そして、淡く、儂く、故に魅せる花を咲かせる」

少年はそれだけ呟いて、私の顔を見た。

「クサすぎましたか」

恥ずかしそうに、はにかむ。こんな顔も出来るのだと、意外に思いながらも感心した。ただの鉄面皮というわけではなく、滅多に感情を表に出さないだけらしい。

「なかなか詩人じゃないの」

私もくすりと笑みを漏らして、少年の顔を見る。随分と大人びていると思っていたが、こうしたところはやはり高校生である。

「いやはや、お恥ずかしい限りです。詩作の趣味は無いのですが、つつい桜の魔力にやられてしまったようですね」

高校生らしいと思ったのも束の間、気が付けばいつもの大人びた表情に戻っている。本当に、不思議な少年だ。余所余所しく感じるはずの敬語も、彼が使うと親しみすら覚える。クサイはずの言葉も、自然と聞こえる。

「いいんじゃない。さっきの、けっこう好きよ。目に見える美しさも、うちから感じられる美しさもあるって、素敵なことだと思うわよ」

目に見えるものが全てじゃない。だけど、見えないものだけ感じようとするのも勿体ない。少年の詩には、そんなメッセージが込められているような気がした。

「そう言っていたいただけだと嬉しいです。いやしかし、貴女もなかなか詩人ですね」

「あら、そうかしら」

「ええ。とても綺麗な表現をされています」
にこりと、少年が笑った。

3、

河原に出向くことが多くなった。ベルベットの川面や月明かり。土や草の匂いに誘われて。そして、少年に会うために。

どうやら少年は毎日来ているわけではないらしく、会えない日もあった。そんな日は、彼に倣って川辺に座り、ぼんやりと色々なことを考えた。取り留めもないことから、時には人生についてまで。

三日間通い詰めて、会えないと思っていたら、対岸にいたこともあった。

梅雨が明けて、日差しが眩しいと感じるようになってきた頃、いつものように河原に降りてぼんやりと佇んでいた。いつもと違うのは、まだ日が沈みきっていないこと。大学が早くに終わって、手持ち無沙汰のまま、ついつい足を運んでしまっていたのだ。

山間に沈みゆく夕日と、たくさんの宝石を鑲めたように輝く川面は、夜とはまた違った美しさがある。煙草に火を灯して、変わりゆくことについて考えてみようかな、と思っていたときだった。

「おや、今日は早いですね」

河原沿いの道から、少年が私を見下ろしていた。

「たまには夕焼けもいいものね」

少しだけ右にずれて座り直す。少年はふっと口元を緩めて、私の左隣に腰掛けた。

「何か、考え事でも？」

「まあね。変わりゆくことについて、考えようかと思っていたところ」

「成程、面白そうですね」

「折角だから、一緒に考えてみる？」

「ええ。ならば、そうですね。夕日が沈み、空の色が変わっていく様を眺めながらというのは、どうでしょう」

低く、よく通る声が心地良い。そうね、と呟いて、ごろりと寝転がった。視界がオレンジに包まれて、土と草の匂いが鼻腔をくすぐる。

「オレンジ色なのに、そのオレンジがそれぞれ違う。グラデーシヨンがかっているし、薄い雲はマーブル模様にも見えるわね」

「ええ……そして、段々と色合いが強くなっていきます。僕は色の変化を見極めるのが苦手なので、こういうときは目を閉じて、しばらくして開けてみるんです。すると、少しオレンジが濃くなっているのがわかります」

「へえ」

ゆっくりと目を閉じてみる。きつと、少年も目を閉じているのだ

ろう。ふうう、と大きな溜息が聞こえた。

「けれど、変わりゆくことって、連続的な事象よね。目を閉じていたら、断続的な変化にしか、ならないんじゃないの。色の変化を見極めるのが難しいとしても、じっと見つめていれば、わかる気がするんだけど」

目を閉じてても、口を開くことは出来る。言葉を紡ぎ、煙草を吸ってみる。寝転がりながら目を閉じて吸う煙草も、くらくらと世界が回るような感覚が味わえて面白い。

「……そうでしょうね。普通ならば、そうなのでしょう。ただ、僕は色盲でして。細やかな色の変化を、視認することができないのです」

思わず、目を開けて少年の顔を見る。私と同じように寝転がっていて、穏やかな表情で目を閉じていた。

「すみません。お気になさらないで下さい。日常生活に支障をきたすレベルではありませんし、きちんと美しいものを美しいと感じることは出来ます」

少年が、また詠った。いつもと同じような堅く、心地よい声で。

節もメロディもないけれど、短調のように聞こえた。とても綺麗で、優しいはずなのに、悲しい詩だった。

「私のほうこそ、ごめん。無神経な質問だったわ」

「いえ、当然のことですし、それに僕は障害だとも思っていないません。僕だからこそ見れるもの、感じられるものだって、きっとあるはずですから」

ぱちりと目を開けて、少年は笑った。

「変わりゆくものも、ほら、見て取れます」

少年は覗き込む私ではなく、その向こうにある空を見て呟いた。私も振り返り、先ほどよりも一層濃くなったオレンジ色の空を眺めた。

「ああ、本当ね。凄くよくわかる」

「変わりゆく様をじっと眺めることができなくとも、変わりゆくこ

とを知ることが出来ます」

「……けど、知ってみたいと思わない？ 徐々に変わりゆく、その様を」

「……そうですね。できれば」

「私が、教えてあげる」

そう。目に見えなくとも、知ることが出来る。少年のように詠うことはできなくとも、私だって言葉は知っている。

「空、眺めていて」

そう言っ、私も空を眺める。いや、じっと見つめる。微かな変化のその一つ一つを注意深く。

「ゆっくりと、夕日の方から、色が濃くなっていく。じわりと、じわりと。染みこむようでもあるけれど、どちらかというところ、浸透していく感じ。雲も少しずつ、陰影がはつきりとしていく。全てが同時に。ゆっくりと、すごくゆっくりと」

ひどく拙いけれど、私は詠っていた。熱に浮かされたように。少年と同じように。

「……ありがとうございます。成程、言葉で感じることも、できるのですね」

少年はにっこりと、屈託なく笑った。何故だろうか、あどけないはずなのに、とても優しく、大人びた表情に見えた。

4、

七月の半ばを過ぎた頃、私は虫除けスプレーを買った。微香性タイプを見つけたのに、少し苦労した。

こここのところ、少年に会っていなかった。期末テストの時期であるし、仕方のないことである。私はレポートを幾つか抱えており、久しぶりに少年の意見を聞きたいと思っていたのだが、生憎と連絡手段を持ち合わせていなかった。私も少年も携帯電話を持ってはい

るのだが、番号を交換していない。いや、それ以前にお互いの名前も知らなかった。

蒸し暑い夜の河原で、溜まったレポートを如何に処理していくか考える。しかしどう考えても、片っ端から書き上げていくしかなく、必要な文献も調べはついていた。だが、書き進める気がしなかったのだ。議題はいつの間にか、如何にしてやる気を出すかということにシフトして、その答えは中々見つからなかった。

いたずらに煙草の本数だけが増えていき、じっとりとした闇が肌に張り付いた。

「ああ、もう」

ちっとも考えることは出来ず、苛立ちだけが募ってゆく。美しいと感じてきたはずの景色も、今は不快に感じた。

今日はもう帰って寝てしまおうか。そう思っただけを浮かせたときだった。

「今宵は、随分とお悩みのようですね」

闇の向こうから、低くて、よく通る声があった。続いてお馴染みの学生服姿が現れる。久しぶりに見る少年の姿だった。

「こつも暑いと、考えもまとまりませんね。少し、歩きませんか？」少年はすいと自然に手を差し伸べて微笑んだ。私は何故か毒気を抜かれたような気分になり、差し出された手を取って立ち上がる。初めて少年と触れたのだと、すぐに気付いた。

「ごろりと寝転がるのも良いですが、散歩も中々なものですよ」

「知ってる。最初は散歩のつもりで来たんだから」

今日ではなく。まだ桜の咲いていたときの話。私は、散歩でもしようとの河原にやって来た。川縁に座らせたのは少年なのだ。

「それにしても、暑くないの？」

最早、トレードマークと言っても差し支えない、学生服を見て尋ねる。もう衣替えの季節も過ぎ、普通は半袖のシャツを着ている頃だろう。

「好きなんですよ。学生服。我ながら、よく似合っていると思うの

ですが」

少年にしては珍しい言葉だった。私は少年をゆっくりと眺めながら、軽く頷いた。

川の流れに沿って、ぶらぶらと歩く。少年は隣で私の歩幅に合わせて、私と同じくぶらぶらと歩いていった。

少年は細長い。背が高いと言うよりも、長い。肩幅が狭く、痩せぎす。そして、それを恥じるように背中を丸めていた。

星は少なく、風は凪いでいた。それでも、さっきまでの鬱屈うっくつした気分は、いつしか消えていた。

「最近、あまりここに来なくなっただわね」

見上げるような形で、少年に話しかける。少年は首を少し傾けて私を見下ろしながら「ええ」と頷いた。

「期末テストがありますから、一応勉強です。もともと、受験生なので本当はここに来る暇は無いですなのですが」

「へえ、受験生か……懐かしい響きね。志望校は？」

「すぐそこの城南城南大学です」

「……ふうん」

どくと、胸が弾んだ。私の通う、大学の名前だった。

「大学生、ですよね？」

少年が言葉を途切れさせながら尋ねる。

「ええ。そう、だけど？」

私の言葉も途切れた。

「もしかして、城南大学に？」

「ええ。そう、だけど」

凪いでいた筈の風が、さわさわと吹いた。髪が揺れる。

「……良い香りですね」

少年がぶつきらばうに呟いた。はて、何のことだろうと首をかしげて、出掛けにふきかけた虫除けスプレーに思い至る。フローラルの香り、だったか。

「ありがとう」

そう言ったきり、口をつぐむ。少年も口を開くことなく、ただ何となく景色を眺めながら河原を歩き続けた。大学の話もそれきりで別れ際に「それでは、また」「ええ、また」という言葉を交わしただけだったが、気まずかったわけではなく、むしろ穏やかで、心地よい時間だった。

帰宅してから気付いたが、少年と歩いている最中、私は一本も煙草を吸っていなかった。

5、

夏が過ぎ、ようやく過ぎしやすくなってきた。

日中はまだ暑さを感じるものの、夜にもなれば涼しい風が吹き、散歩にはうつつつけの時期とも言える。

煙草に火を灯して、久しぶりの散歩と洒落込む。夏休みの間、実家に帰省していた所為で、一ヶ月ほど少年に会うことが出来なかった。

下宿先に着いた頃には夜半を過ぎており、荷物を置いたなり、すぐ河原に出る。数時間の電車旅に凝り固まった身体をほぐしながら、相も変わらずぶらぶらと歩いた。

夜空には三日月が淡い光を帯びて浮かんでいる。風が芝を揺らし、ざあ、と音を奏でる。懐かしいような、でもやはり変化のある、いつもの河原だった。

「佳い夜ですね」

そして、彼もまたいつもどおり。学生服を着て、銀縁の眼鏡をかけていて。胸の奥をくすぐるような低い声も、理知的な瞳も。十八の夏を過ごしたとは思えない、白い肌も。風に微かに揺れる前髪だけ、少し伸びていた。

「真面目に勉強するということを、長らく忘れていました。受験勉強というよりも、脳に知識を詰め込む準備運動に、夏休みを使ってしまった感じですね」

少年は苦笑しながら、私の右隣に座った。夏の頃よりも、少しだけ距離が縮んだようにも思える。

「私は、実家に帰ってゴロゴロしてただけ」

「へえ、では一人暮らしをしていたのですね」

「ええ。そうでなければ、流石にこの時間に外に出てないわよ」

一人暮らしをしている。そんなことも少年に言っていなかった。

不思議なことだ。既に半年近くも言葉を交わしているのに、お互いのことを、ほとんど知らない。名前も、電話番号も。

否、知っているのかもしれない。背が高くて、痩せていて、学生服をいつも着ていて、銀縁眼鏡をかけていて。整っているが地味な顔つき。河原で物思いに耽るのが好きだということ。色盲であること。そして、私の通う大学を目指していることも。

まだある。フローラルの香りが好きで、とても面白い考え方をする。言葉遣いは丁寧で、ぶっきらぼうな口調のときは、少し照れている。きつとロマンチストで、根は熱血漢

「ねえ」

名前を、知りたいと思った。彼を少年と呼ぶことがひどく躊躇ためらわれた。

尊敬できる一人の人間を、子供扱いしているように呼ぶのは、趣味じゃない。

「そういえば僕たちは、お互いのことを、ほとんど知らないままでしたね」

私が問いかけようとするのを遮るように、じっと私を見て少年が呟いた。

「大学でお会いしたときに、名前を知らなければ声をかけるのに不自由そうです。よければ、お名前を」

……本当に、不思議な少年だ。こっちの考えを読んでいるような

話し方をしてくれる。

「気が早いわね。合格の報せを聞いてからでも遅くないわよ？」

「まあ、背水の陣の一つとして。見得を切って、不合格で言った言わけにもいかないでしょう」

ひゅう、と風が鳴った。少年はにっこりと笑って、私を正面から見据えていた。

「……鹿子。南鹿子よ」

なんとなく気恥ずかしくて、目をそらして、ぶっきらぼうに答える。その仕草が、どこか少年を真似しているような感じで、余計に恥ずかしくなった。

「鹿子さん……綺麗な名前ですね」

少年の低い声で名前を呼ばれた途端、どくと心臓が跳ねた。どくん、どくん、どくん。

そのリズムは、とても恥ずかしくて、そして、心地よい。

「……そっちも、名前教えて。後輩になる男の子を、いつまでも少年なんて呼べないし」

煙草に火を灯して、ゆっくりと少年に尋ねる。胸一杯に煙を吸い込むと、少し落ち着いた。

「参りましたね。これじゃあ、ますます合格しなければなりませんよ」

少年はそう言って笑い、ゆっくりと川面を見やった。

その様子をじっと眺める。少年の横顔が好きだ。眼鏡越しではなく、直に彼の理知的な目を見ることが出来るから。

「背水の陣、でしょ？」

「……そうですね」

少年の目が、私を捉える。穏やかな表情であるのに、瞳だけが力強い。最近知ったことだが、彼は目に感情が良く出る。

「高木、聖人です」

ふいっと目をそらして、それでもはつきりと少年　否、聖人は名前を告げた。

「へえ……じゃあ、聖人って呼ぼうかな」
私も、名前で呼ばれたことだし。

6、

肌寒くなってきただろうか。

冬が近付くにつれて、聖人は河原に姿を見せなくなっていった。
受験生である。仕方あるまい。

私は、逆に足繁く通っている。というか、毎日河原に赴いている。元より北国育ちで寒さには強い。

今夜も一人、河原を歩く。

すっかり葉の落ちた桜の木は、やはり来るべき春に向けて、その内に胎動を秘めているのだろうか。寒さにじっと耐えているようにも見える。

澄んだ空気に煌々と瞬く星は、冬が一番美しい。川面は、相変わらず滑らかな光を見せている。シルクのようなだと、ふと思った。

聖人はいない。十一月の半ばから通いつけているが、十二月に入っても、姿を見せなかった。

「……寒い」

厚手のコートを羽織ってきたのだが、さすがに三十分も河原にいと、体の芯の方から冷えてくる。寒さには強いはずだったが、気を紛らわせるように、コートから煙草を取り出して、啜える。

火を灯すと、寒さが少し和らいだ。

今宵は満月。久し振りにと、月に向かって紫煙を吹きかける。

「冬に朧月つてのも、あんまり似合わないわねえ」

適当に腰を降ろして、煙草を揉み消して、ため息をつく。最近、独り言が多くなってきているような気がする。

聖人が、居ない所為だろう。彼の落ち着いた、低くて良く通る声が聞きたかった。堅い口調で、詠うように語って欲しい。

煙草を持つ手が、震えてきた。いよいよ、限界だろう。
携帯電話を取り出して、時間を確認する。河原に来て、一時間も経っていた。

ゆっくりと立ち上がる。家に帰ったら、まずは珈琲だ。口が曲がってしまつぐらい苦いのを淹れよう。

歩を、進める。くわえ煙草で、後ろ手に組んで。ふらふらと。

「鹿子さんっ」

もう、当分来ない方がよい。そう思った途端、背中から声が出た。いつもより弾んでいたが、低く、よく通る声だった。

「すみません。本当はもう少し早く来たかったです、せつかく家族が宴を開いてくれているのに、主賓が抜け出すわけにも行かなかったのです」

「へ………？」

開口一番の言葉に、私は面食らった。

一体、少年は何を言っているのだろう。今日は何か、特別な日だったのだろうか。

「……あれ？」

私の様子を見て、少年は拍子抜けしたような様子だった。今日の少年は、どこか変だ。勉強のしすぎで、ノイローゼにでもかかったのだろうか。

「……ん？」

ふと、ひっかかりを覚える。勉強……受験……そして、宴。

「あ、ああ！」

聖人は、受験生である。その聖人が宴の主賓となるなら、答えは一つしかない。

「合格、おめでとっ」

いつしか手だけではなく、身体が震えていた。身を切るような風が、ますます体温を奪っていく。

寒い。だけど、どうしてだろう。聖人の顔を見た途端、今まで以

上に胸がどくどくと脈打って、心が温かくなった。

「もしかして、ずっと待っていてくれたのですか？」

「え、いや、そうでもないけど」

「でも、震えています。手も、冷たい」

聖人はそう言って、私の手を握った。かじかんでいた指先が、温もりに触れる。くわえていたはずの煙草が、いつしか足もとに転がっていた。

不思議だと、思った。

手が触れるだけで。どうしてこんなにも、動悸のように胸が高鳴るのだろうか。どうしてこんなにも、聖人のことが好きだと感じるのだろうか。

もう、駄目だ。何も考えることが出来ない。感じるのは、うるさいぐらいの鼓動と、指先の温もりだけ。

気付けば、吸い寄せられるように、聖人の胸に飛び込んでいた。

「……鹿子さん」

頭の上から、聖人の声が聞こえる。相変わらず低くて。でも、胸が潰れてしまいそうな、声だった。

聖人の手が、私の手から離れる。それだけで、急に不安になって、身体がびくりと跳ねた。

「鹿子さん」

不安を和らげてくれるように、聖人はそっと、包み込むように私を抱きしめてくれた。

どくどくと、聖人の胸の音が聞こえた。私の胸と同じくらいに、早鐘を打つように高鳴っていた。

「鹿子、さん」

ぎゅっと、聖人の腕に力が籠もる。それが、ただ嬉しかった。

「……聖人」

そっと、私も聖人の背中に腕を伸ばす。学生服越しに、聖人の身体を抱きしめた。

「……やだ、私より細いんじゃないの？」

思っていたよりもずっと細くて、思わずそんな台詞を口にしてしまう。

聖人はそんなことはないですよと呟いて、照れたように笑った。

再び、河原に腰を降ろす。

寒くはない。何故なら、聖人が隣にいてくれるから。いや、それだけではない。寄り添うように、肩を抱いてくれているから。

ずっと、二人とも喋らなかつた。ただ、側にいるだけなのに、幸せだと感じた。

あんまりどきどきと、わくわくと身も心も浮つくものだから、思わず煙草に手が伸びた。

「……ふう」

妙な話だが、煙草の味も一層美味いと感じてしまう。御都合主義だと笑われるかもしれないが、前言を撤回しようと思う。恋をしてよかつた。聖人を好きになれて、よかつた。

聖人の横顔を眺める。聖人も、私を見ていた。

「……鹿子さん。ひとつ、お願いがあります」

「ん。なあに？」

「僕にも、煙草をいただけませんか？」

へ、と声をあげる。聖人は、煙草を吸いたいとは思っていないと、春に言っていた気がするのだが。

「別に良いけど。私のは、キツくて重いわよ」

煙草を取り出して、聖人に渡しながら尋ねる。聖人はどうも言つて煙草をくわえ、苦笑した。

火を灯してやる。聖人は不器用に吸つて、軽くむせた。

「大丈夫？」

「え、ええ。いやはや、鹿子さんは、ずっとこれを吸っていたのですね」

聖人は涙目になりながら、それでも煙草を吸った。上手く肺に入つたのか、むせなかつたが、今度は不思議な顔をした。

「やっぱり、やめなさい。捨てていいから」

コートから携帯灰皿を取り出して、聖人の前に出す。しかし、聖人はなおも煙草を離そうとはしなかった。

「……すいません。でも、吸ってみたかったです。鹿子さんが吸っている煙草を。好きな人の、真似がしたくなつたのと……」

不覚にも、聖人を可愛いと感じてしまった。いじらしいというか、妙なところだけ子供っぽいというか。

「それに、煙草の味が相殺できるかな、と。その、キスのときに「えっ!?!」

驚いて振り向く。聖人は、じつと私を見つめていた。

頬が、微かに朱に染まっている。困つたような、やはり可愛い目をしていた。

「……名案かもね」

聖人らしい、面白い考え方だと思った。

最後に煙草を思い切り吸う。聖人も、真似するように吸った。

二人で同時に月に向かって吐く。二筋の紫煙が絡み合い、朧月を作り出す。

そして、私は聖人を見上げて、ゆっくりと目を閉じた。

(後書き)

拙作を読んで頂き、ありがとうございました。

日頃から、ラヴコメばかりを書いており、このような女性視点の恋愛小説を書くのは、ほぼ初の試みでした。

特に、これと言った事件もなく、順調に歩み寄った二人でしたので、これと言った盛り上がりこそありませんでしたが、二人を幸せにできたと思います。

よろしければ、御感想のほう、よろしく願います。

尚、タイトルの天鷲絨てんがじゆは、ベルベット。衣類に使われる布の一種です。紫朧は造語です。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0053c/>

川は天鷲絨、月は紫朧

2008年11月7日06時31分発行